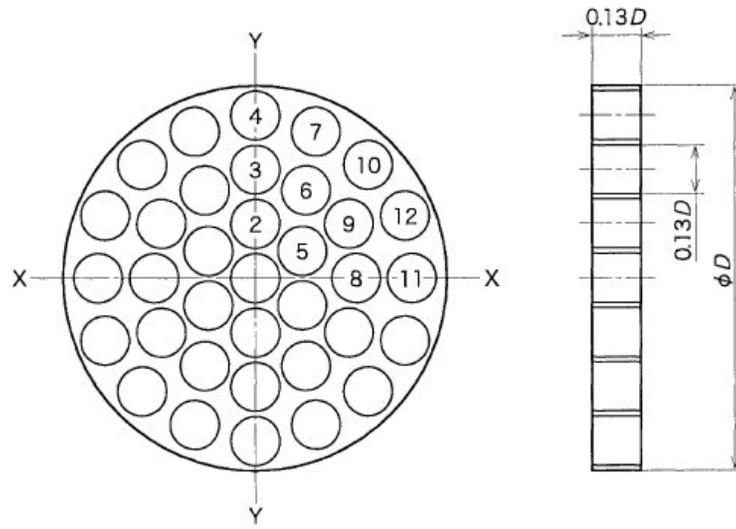


表 3 標準 2 型の上流側必要直管長

管路要素	必要直管長 $L$	
	付加不確かさ $u_f=0.125\%$	付加不確かさ $u_f=0.25\%$
単一曲がり	$L \geq 20D$	$20D > L \geq 10D$
同一平面二重曲がり	$L \geq 15D$	$15D > L \geq 10D$
立体二重曲がり	$L \geq 10D$	—
縮小管	$L \geq 10D$	—
拡大管	$L \geq 20D$	$20D > L \geq 15D$
ゲート弁半開	$L \geq 20D$	$20D > L \geq 15D$

備考 ここに示す直管長  $L$  には、流量計と整流器間の直管長(10D)が含まれる。

- c) 渦発生体の中心軸から下流側 1D 以内の管路部には段差があってはならない。
- d) 標準 2 型を使用する場合には、流量計の上流に図 11 に示す構造の整流器を設置する。整流器は流量計の上流側 10D の位置に設置し、図 11 に示す整流器の X 軸が渦発生体の軸と平行になるように取り付ける。



X軸が渦発生体に平行になるように取り付ける。

図 11 標準 2 型とともに用いる整流器

JIS Z8766 : 2002 解説23ページ

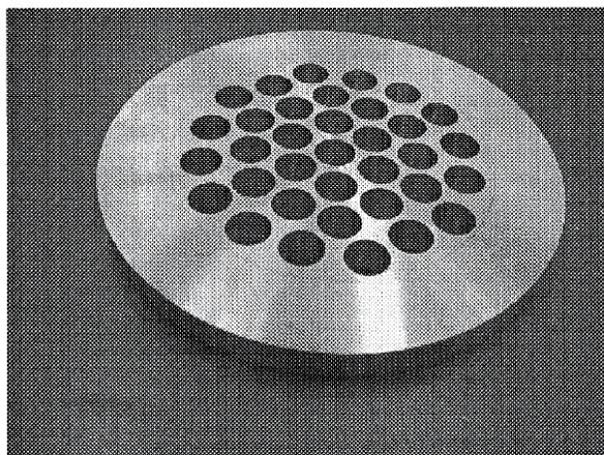
- b) 上流側直管 この流量計の特性は、配管内の流れの旋回流や流速の不均一な分布などの影響を受ける。これらは、流量計の上流側で使用されている配管機材の種類や接続状況、溶接バリの突出し、その他流れを乱す種々の配管条件に起因している。このため、流量計を取り付ける場所までに流れを整流することは、配管設計上重要である。整流は、流れを乱す配管要素の下流に適当な長さの直管、又は直管と整流器を組み合わせたものを設置して行う。

なお、整流装置としては、種々のデザインが提案されているが、これらの中でも解説図 3 及び本体図 11 に示す明石型は最も効果があることが確認されているので推奨できる。

JIS Z8766 : 2002 解説24ページ

24

Z 8766 : 2002 解説



解説図 3 明石型整流装置